
奇承転結っ！

緑瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇承転結っ！

【Nコード】

N2034X

【作者名】

緑瑠璃

【あらすじ】

稲美学園にやってくる転校生は不良校から来た子！？

でも不良…じゃなさそう。

ていうかむしろかっこいいし優しそう！

そんな転校生、森守真の周りには変な奴らが集まってくる。

ハッキングなどを得意とし、バッチリ犯罪者の域に達している少女。

キレやすく喧嘩っ早いが、あまり喧嘩は強くない少年。

特殊な能力を持っているが、反面大きな悩みを抱える少女。

怪しい薬品ばかりをつくる、理系専門の少年。
でも森守真も十分異常だということを、本人もまだ知らないだろう。

普通の転校生

稲美学園。

最近造られた学校であり、学力はそんなに高くない学校だが、校舎の外見や設備などで人気があり、転入を希望する生徒まで出てくるほどだ。

そんな稲美学園に今日、転校生がやってきた。

それは朝のうちから学校内で噂になっていた。

普通なら、「今日転校生が来るんだって」「へー」ぐらいな会話で、あまり話のネタになる噂とは思えないが、今回は違っていた。

「転校生は不良校からの転入生らしい」

あくまでも噂のレベルで真偽はわからないが、この噂は学園中に広まって生徒達の警戒レベルを5まで引き上げた。

不良と言うからには何をしでかすか分からない。

暴力でこの学校を全支配してしまう可能性も0ではない。教師の方もこれに対し、対策を練っていた。

そして問題の転校生はやって来た。

どんな奴なんだろう？

不良ならやっぱり・・・顔に傷とか・・・？ 特攻服だったりして・・・。

各自、まだ見ぬ転校生の姿を想像して震え上がる。そして、

「今日は転校生を紹介しよう。森守くん入ってきなさい」

「はい」

教室の戸がガラリと開けられる。

キターーーーーー!!!!!!

織田裕二ではないが、みな心中ではその言葉を思い、生唾を飲み込
んだ。

・・・が。

「えと・・・森守真もりすまことです。よろしくお願いします」

入ってきた転校生はあまりにも「普通」だった。

まじめで優しげな顔つき、少し色素が抜けたように茶髪気味の髪、
きっちり着込んだ制服。

どれをとっても「普通」。いやそれ以上に「美少年」だ。

先ほどから女子は小さく歓声をあげている。

男子は女子の反応を見て、真という男を睨みつける。

でもなんにしたって怖い人じゃないことは確かだ。

内心みんなホッとしている。

「では森守君。あの席につきたまえ」

「はい」

クラスの視線を一直線に受けて、席へと向かう真。

不思議と彼の周りには花が浮かんてるように見えるのは気のせい
か。森守真という男を新しくクラスにむかえ、またいつも通りの授業が
始まった。

そんな中、授業中だというのに、真から少しも視線をずらさない女

がいた。

彼のかっこよさに惚れ惚れしている・・・というわけではないようだ。

ただじーっと真を見つめ、その後何かを思案するように頬杖をつく。ふいにその女は小さく呟いた。

「なにせよ、この男は普通じゃないよね・・・。みんなに後で知らせなきゃ」

午前中の授業が終わり、昼食の時間帯となった。

真も購買部でも買ってこようかと思ったが、そのときいっせいに女子に囲まれてしまった。

「真君ってどこから転校してきたの？」

「真君って誕生日いつ？」

「真君の血液型は？」

「真君の髪って地毛？染めた？」

「真君本当はどこかのモデル？」 「あ、それあるかも！ねえどうなの真君？」

「ねえ真君・・・」

完全に質問攻めだ。一人一人の質問に答えていられないので、真は上手く女子の間を抜けて教室を出た。

さあパンを買ってこよう。そう思いやっとな廊下を歩き出した。

——真は、その後一人の少女に会い、そのままどこかへ連れ去られることになるのだが、それはもう少し後になる。

「ねえリユーク！聞いて！」

「・・・あ？」

「今日来た転校生ね、ヤバイよ。なんかヤバイ。あいつはヤバイ」

「・・・なにがどうヤバイのか具体的に言え。イライラする」

「具体的って・・・。んー、女の勘？でもあえて言うなら・・・普通だったから」

「普通？」

「授業中にずっと観察してたんだけど、不良校から来たのにあの落ち着きようはありえないよ」

「・・・へー」

「反応薄いなあ。で、その子真君って言うんだけど・・・私達の仲間にならない？」

「なんでだ？」

「おもしろそうだから」

「・・・」

「なんか言ってよ。何？もしかしてリユーク人見知り？キヤーかわいそう！」

「うぜえ黙れ死ね」

「相変わらずひどいなあ。でもいいよね？仲間にしてもいいよね？」

「・・・好きにしたらいいだろ」

「やたー♪でも他の二人の許可もらわないと。あ、まあ後でいいか」

「・・・知らねえぞ。二人に怒られても」

「大丈夫だよ！あの二人はリユークと違って社交的だから！」

「・・・黙れ殺すぞ」

「キヤー怖ーい！じゃ、私、真君呼んでくるね！」

「早く出てけ。そして戻ってくるな」

「えー。ひどーい」

この日真の運命は変わってしまうことを、本人もまだ知らないだろう。

普通の転校生（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

まだ意味がわからない段階かと思いますが、その辺については2話で詳しく書いていきたいと思います。

感想もらえたら嬉しさで狂い死にます（＊――＊）

奇妙な女の子（前書き）

奇承転結、第2段です。

相変わらずの文章力の無さですが、読んでいただければ嬉しいです。
それでは、どうぞ！

奇妙な女の子

森守真がパンを買いに行こうと廊下を歩き出した、まさにその時だった。

後方から元気な声が飛んできた。

「ねえ真君！」

振り返るとその声の主が居た。

茶髪でボブショートヘア。お茶目な雰囲気の子だった。

またこの女の子に質問攻めにされる、と真は思った。

申し訳ないが構ってられないので、適当にあしらおうと口を開く。

「あの、悪いんだけど俺今忙し・・・」

「ついてきて！」

その女の子は、真の腕を無理やりつかんで歩き出した。

「ええ？え、ちょ・・・どこに行くの？」

「いいから！黙ってついてきて！」

真はまだ状況が把握できていないが、とりあえずその言葉の通りに黙ってついていくことに決めた。

女の子はずんずん歩いていく。

そしてついた先は―――屋上の扉の前だった。

屋上に出るつもりだろうか。でも屋上の扉には「立ち入り禁止」という紙がはってある。

「ねえ、ここ、立ち入り禁止になってるみたいだけど・・・」

「あ、ちがうよ？屋上には用はないし。」

女の子はそういつて屋上に出る扉とは反対の方、つまり何もない壁の方を向いた。

何もないはずのその壁に手を当てて――。

「ピッ」

確かに音がした。すると壁に亀裂ができた。その亀裂は音もなくゆっくり開いていき、ついに人一人入れる大きさとなった。

真はただその光景を目を丸くして見つめるだけだった。だが不意に放心状態から戻ってくると、あわてて問いただした。

「な、なにこれ！？どうなってるの！？どうして開くの！？」

「へへーん。すごいでしょ」

「えっと・・・ここ、はいれるの？」

「うん。ついてきて」

そして女の子と真は壁の亀裂に入っていく。中は廊下のようになっていて、その先に部屋があるのが見える。

ふいに女の子がふりかえって言った。

「ねえ、アタシの名前、言ってなかったっけ？」

「うん、聞いてない」

「アタシ、奈原魅月。なはらみつきよろしくね。真君！」

「え、ええ？えーと、よろしく」

戸惑いつつも二人で握手を交わした。

「ねえ、魅月さん。あの・・・なんで俺こんなところに呼ばれたの？」

「真君、私達の仲間になって！」

答えになってない・・・と思いつつも、なんだ俺と友達になりたかっただけか、と一安心する。

ただ友達になりたいだけにしてはずいぶん大掛かりだが。こんなところまで呼び出す必要はないし。奇妙なこの部屋もいったいどうやって・・・。

色々聞きたいことが頭に浮かんだが、頭の中に押しこめた。でも真はそこではたと思った。「私・・・達・・・」

「ねえ、『私達』って・・・」

「目の前の部屋。そこにもう一人いるから。ほんとうはアタシもあわせて4人居るんだけどね。今日は学校サボりみたい」

魅月は目の前の部屋を指差す。

明かりが灯ったその部屋に、チラッと人影が見えた。

魅月はまた真の腕を掴んで、その部屋へとぐいぐい引っ張った。

ついに部屋の前まで来て、その扉が開かれた――：

そこには一人の男がいた。

金髪にメッシュ、そして見る者に恐怖を与える鋭い目付き。

どこからどう見ても「不良」という表し方しかできない。

その人物が口を開いた。

「テメエが森守真か…？」

奇妙な女の子（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました！

本当に書きたいところはまだまだ先にあるんですが、キャラ紹介にあと3話位使うかもしれません。

長くなると思いますが、よろしくお願いします。

あと、意見やアドバイスもらえると嬉しいです。実は一度ももらったことがないんです…（T|T）

強そうな少年（前書き）

奇承転結、第3話です。

ピンポンパンポーン

皆さんにひとつお願いがあります。

感想、意見、アドバイスをください。

繰り返します。感想、意見、アドバイスをください。

ピンポンパンポーン

強そうな少年

「テメエが森守真か…?」

その少年は開口一番にそう言った。

その低い声音があまりにも恐ろしく、真は冷や汗が吹き出すのを感じた。何か喋ろうと口を開くが声は出ず、パクパクと口を開閉するだけだった。

すると隣の魅月が真の代わりに喋り出した。

「そうだよーリユーク。この人が真君。仲間になってくれるんだって! ね?」

急に話をふられた真はなんとか「うん…」とだけ言うことができた。どうやら魅月とこのリユークと呼ばれる人は仲がいいらしい。

まあ、魅月が真をこの部屋に連れて来たのだから、当たり前だが。

すると魅月は余計な一言を付け加えた。

「ダメだよ? リユーク。初対面の人にそんな態度をとっちゃ。だからリユークは友達が出来ないんだよ?」

「……」

リユークは無言だったが、完全に怒っていることがわかる。きつと額には「×」のようなマークが浮きでているだろう。

(もうここにいられない)

命の危機を感じた真がその場から立ち去ろうとした時、リユークが口を開いた。

「…悪かったな、真」

いきなり謝られて驚いている真に、魅月が耳打ちした。

「ね? リユークは根は素直なヤツだから」

その言葉に真が深く安堵したことは、言うまでもないだろう。

「んじゃ、改めまして、自己紹介しましょう！」

魅月が明るい声で言う。

魅月のムードメーカーとしての才能はピカイチなんじゃないか、と真は思った。

そうは言っても、リユークと呼ばれる少年は一向に口を開く気配がない。

ここは自分から喋るしかないか…。

真は意を決して口を開いた。

「あの…僕、森守真です。どうぞよろしくお願いした、いたします」最後の最後で囁んでしまったが、なんとか喋ることができた。

するとリユークのほうも口を開いた。

「俺は白崎竜しらさきりゅうだ。…まあよろしくな」

「はいっ！こちらこそ！」

初めて真と竜の間に会話が成立した瞬間だった。

魅月が弾んだ声で言った。

「真君は私達の仲間だからね♪」

仲間、先ほどから魅月はその言葉を強調している気がする。友達、じゃないのか？

真はそのことを聞くなら今しかないと思い、口を開いた。

「あの…、仲間ってどういう意味ですか？単純に友達って意味じゃないですよね？」

『生徒会の仲間って意味』

魅月と竜が同時に答えた。

竜が露骨にイライラし始めたので、魅月が丁寧な説明を加える。

「私達は生徒会の一員なの。生徒会といっても裏、生徒会？」

「裏？」

思わず聞き返した真に、今度は竜が答えた。

「生徒会と俺達は何も関係ない。裏生徒会っていうのは名だけだ。俺達は目的があって…」

「シー—！」

魅月があわてて竜の言葉をさえぎった。

「目的って…？」

真が聞き返してみても、二人からは何の反応もない。

よほど重要な秘密だったようだ。

しばらくの沈黙の後、魅月がようやく口を開いた。

「…目的についてはまだ話せない。そのうちに話すから！」

真は無理に聞き出そうとはしなかった。なんとなく聞かないほうがいい気がしたからだ。

その代わりにそのことより気になっていた疑問をぶつける。

「あの、ここはいったい…どこなんですか!？」

『秘密の部屋』

またもや魅月と竜が同時に答えた。しかも答えになっていない。

「…おい。魅月。お前さっきから何俺とタイミングかぶってるんだ」

「それはアタシの台詞! リュークこそなんでアタシとかぶるの!？」
激しい口げんかに発展しそうなところで、真が止めに入った。

「もう、そのへんで言い争いはやめにしてください…。それより『秘密の部屋』って言われたってピンときませんよ。もっと詳しく教えてください」

「あのね、ここは屋上にある部屋なの。屋上から見たらばれな部屋だけど、屋上は見ての通り立ち入り禁止だからばれないばれない!」

真は魅月の答えをもっと深く追求する質問をした。

「でもなんでばれずにこんな部屋作れたんですか? それにこの部屋につながる隠し扉の指紋認証装置…。あんなすごいものどうやって?」

『・・・それは秘密』

本日3度目。魅月と竜がハモった。

「魅月・・・テメェなあ・・・」

「リ्यूクねえ・・・」

二人の間に火花が散った。ヤバイと思った真がまたもや止めに入る。

「まあ、二人とも。ケンカはやめにしましょう？ケンカするほど仲が・・・」

『よくない！！！！！！』

本日4度目である。

二人は真の制止を無視して、ギャーギャー口ゲンカを始めてしまった。

そのときだった。

「ケンカはよくないよ？二人とも」

扉から少年が入ってきた。その人物は次に衝撃的な言葉を発した。

「いい加減にしないと、塩酸浴びせるからね？」

強そうな少年（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

この小説1話1話が短いので、話の流れが遅いですね。

とまあそんなことはどうでもいいんです。

前書きにも書いたように・・・

感想、意見、アドバイスください！！！！！！！！

まだ一回も貰ったことがないんです（泣）

この際「おもしろくない」の一言でもいいです！

おもしろくないということは分かっているので（泣）

お願いします。

理系少年と不思議な少女

「いい加減にしないと塩酸浴びせるからね？」

そういう少年の手には、なんだかよく分からないビンが握られていた。

とたんにその場の空気が凍りつく。

『ごめんなさい』

とりあえず3人で謝った。竜だけは納得いかなそうな顔だったが。

それにしても、と真は思う。

この人何者なんだ？

かなり怖いことを言ったが、とても怖くは見えない童顔気味の顔だ。そしてなぜかメガネを額にかけている。ファッションのつもりだろうか？

するとその少年が真を見て口を開いた。

「・・・この子誰？ 魅月がつれてきたの？」

「はい、そうです。」

魅月は間の抜けた返事をした。

ああ自己紹介するしかないのか。真は正直言って自己紹介が苦手だった。

「あの、僕は森守真です。みなさんのお仲間に・・・えーと」
言葉に詰まってきたところで、魅月がすかさずフォローする。

「真君は私達の仲間だからね。あんまり脅したりしないでね?・・・できればわたしのことも」

最後にボソッと自分のお願いを言ったが。

メガネ少年はふいに真に話しかけた。

「真君、だね? 僕は青桐透也^{あおぎりとうや}。よろしく」

「あ、はい。よろしく願います・・・」

真もあわててそれにこたえる。なんだか近づかないほうがいい人かも知れない、と思った。

魅月は真に耳打ちした。

「透也君は薬品ばかりあつかってね。普段は優しいけどさ。昔、私達にケンカふっかけた不良に、ホウ素を口の中につっこもうとしたことがあるんだよ。・・・気をつけてね？」

背筋に冷たいものが伝うのを感じた。

そこで真ははたと気づいた。透也の後ろに人がいたのだ。

その人をみて息を飲んだ。

あまりにも美しい少女だった。雪のように白い肌に、腰まである長い黒髪。

だが黒い瞳にはなんの感情もなく、まるで人形のようなと思った。

「あ、瑠璃っち！学校休むんじゃないの？」

その少女を見たたん、魅月の表情がパアッと明るくなった。どうやら魅月とこの少女は仲がいらしい。

「・・・魅月ちゃん。こんにちわ」

真は少女の声を初めて聞いた。すごく透き通っていて、なんというか、風のようなと思った。

この少女には絶対惚れるわ、どんな男子であろうと。

「・・・あの、あなたは・・・」

真は少女に話しかけられて、顔に血が集まっていくのを感じた。沸騰寸前である。

「——わわ、こんなとき何を言えがいいんだろう？まずは名前だよね、えっと」

「は、ははじめまして！も、まままりす、まことです」

言ってしまうてから後悔した。
待て、慌てすぎだろ僕。

誰だよ、「まりすまこと」って。

「……まりすさんですか？初めまして。私は星野瑠璃ほしのるりです。……瑠璃って呼んでください」
瑠璃さんも瑠璃さんで「まりす」という苗字に違和感を覚えていないようだ。

「瑠璃っち、この人はもりす、まこと君だよ」

魅月がすかさずフォロー！

さすが魅月、やっぱりいろんなところで気が利く！

真が魅月を心の中で褒め称える。

もりす、という指摘を受けた瑠璃はやはり淡々とした調子で言う。

「……すいません。まりすまことさんですよね」

このとき、真は気づいた。

瑠璃は感情を表に出さないタイプなのだと。

理系少年と不思議な少女（後書き）

正直に言うところの作品、いわゆる「駄作」なんだなあと思います。でも途中で書くのをやめることはしたくないんです……。完結させないと、物語として成り立ちませんから。それに、あきらめ癖がつくとやっかいなんです……。

だから完結するまで、できればお付き合い願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2034x/>

奇承転結っ！

2011年11月17日19時21分発行